
『空』

DARK CAT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『空』

【著者名】

DARK CAT

N6107C

【あらすじ】

多ジャンル創作集団（？）DarkCatProduction（D・C・P・）によるテーマ別作品集。第一弾のテーマは『空』でお贈りします。

『逢』（前書き）

D
· C
· P
· - f
e a t
· 波崎由歩『逢』

『逢』

『逢』

数日、ふりに見る
薄青い空は
雨の気配を流して
太陽を覗かせた

水たまりに映る
ブランコや
電線に休む
小鳥たち

見てる景色は
違うけど
見える世界は
きっと 同じだよね

遠く離れた

あなたとの距離

つながりは
声だけだけど

信じてるよ

あなたもこの空を
見てるってこと

わかってるよ

「寂しい」なんて
言つぱいやいけないこと

今日も明日も
いつかくる
再会の日を想つて

私はずっと
ひどく輝く空を
見続ける。

『逢』（後書き）

えーとはじめまして、波崎 由歩 と申します。今回、館波さんにてまさかのお世をかけられまして、このような企画に参加させていただきました。（恥）『逢』とこのテーマで書かせていただいたのですが、…一応、遠距離恋愛みたいな…ことを書きたかったのです、伝わったのが不安ですが…、少しだけ、何か感じ取ってくださいたのなら幸いです（—）= あいがとうございました。

『かげら』(前書き)

D
·
C
·
P
·
-
f
e
a
t
·
館
波
実
笠

『かわら』

今日も先輩は空を見ていた。

蒼く吸い込まれてしまいそうな空を飽きもせず、何も考へていよいよ
うな顔で、ずっと見ていた。

何もない屋上に寝そべり。服が汚れることも気にせずに……

空、好きなんですか？

私がそう訊くと先輩はいつも

……ん、ああ、キライってわけじゃないよ。でもそこまで好きでもないかな……そうだね、ただぼーっとするのが好きなだけ。

そう答える。

なんとなくはぐらかされた感じがして嫌なのだけれど、不思議と納得できるような気がした。

雲のような存在なのだ、彼は。どこか曖昧で、吹けば消えてしまい
そうなほど脆く見える。

だから……正直なところ、なぜだかはわからないけれど、こんな
ことを聞いていた。

先輩つて彼女いるんですか？

後で思つたのだけれど、それは好奇心からきたものではなく、少し心配だつたからだ。

脆く壊れやすそうな彼を支えてあがられる存在はいるのだらうか、
と思ったから。

けれど……

いや……いないよ……

ぱつり、とそう答えた。

そのときの先輩の背中はやけに小さく見えた。 そのとき私は先輩
がどこか遠くへ行つてしまいそうで嫌だった。

次の日も、また次の日も先輩は屋上にいた。

今日も遠い空の彼方を、どこか虚無的な目で見つめている。
ただいつもと違う点が一つ。

彼は一人ではなかった。二つの声がまるで言い争つかのような声
音で飛び交っていた。

まだここにいたのかよ……

私は先輩が誰と一緒にいるのかわかった。 確かよく先輩とつるん
でいる男友達だ。

悪いか？ 僕がここにいたり。

いつもと同じように感情のこもっていないような声ではなく、ど
こか怒気がこもったような先輩の声。

いつまでも引きずつくるつもりだ……

まあ……お前の心配する」とじやない……

きし……

必要以上にドアにもたれかかってしまい、錆びた鉄の音が響いた。

誰だ？

男友達の方の先輩がはつとする。

私は隠れても仕方ないので、ドアから屋上を覗き込むようにして身を出した。

……またお前か。いい加減、こいつにしきまといつのも止めた方がいいぞ？ 仕方ない、また今度来る。

そう言い残すと、彼は屋上を後にしていった。
後ろ姿を追っていた田を、先輩に戻すと、彼はどこか悲しそうな田でこちらを見ていた。

普段は絶対に見せない表情。それが私の心に、ナイフのように突き刺さつた。ざくりと心が深くえぐれるような音がしたかのよ、……

今日も、来たんだ……

悲しそうな田で、口元は微笑を浮かべていた。それがいつそう悲しい。

そんな顔をされても、私はどうしても聞きたかった。

先輩が、ここにいる理由ってなんなんですか……？

ああ、やっぱりあなたはそういう顔をするのだ。一番、聞かれたくないことを聞かれたとき、ヒトはそういう顔をするのだ。
はぐらかせるわけもなく……真実を隠せるわけもなく……そんな

顔をするのだろう。

たぶん、これを聞いたら私は戻れなくなる。

前の私と、先の私。

その境界で、彷徨つている。

ああ、やはりそれを聞くのか。一番聞かれたくないことを聞かれたとき、ヒトはこう思うのだ。

はぐらかせるわけもなく……真実が隠せるわけもない……いつも複雑な想いになるのだろう。

たぶん、これを行つたら自分は戻れなくなる。

前の自分と、先の自分。

その境界で、迷つている。

一年半ほど前だろうか。

彼女が自分に想いを伝えたのは……

それは突然のこと、互いの鼓動が聞こえそうなほどだった。今でも彼女のコトバを思い出すことができる。

それほどに強く刻まれたキオク

それほどに強く刻まれたコクイン。

忘れられることなどない、オモイ。

それから一人はかけがえのない存在へ。互いに優しくしあえる存在へなつた……

陳腐な言葉かもしれない。けれどもそうとしか考えられない、そういうとしか思えなかつた。

この手を離さなければ。

この肌のぬくもりを感じ続けていれば。

想い続けられたのに……

あいつは……空が好きだった。

昼の空も、夜の空も。

一人でずっと見ていたいでも飽きなかつた。

太陽が昇り、航空機が雲をひき、月が満ち、星が流れても。

今となつては、すべて幻想。夢散してしまつた想い。

彼女は空のカケラになつたのだ。

半年前の事件、覚えているか？

半年前？

なんだつたら、と頭の中をぐるぐるとかき回すようにして、一つの答えを見つけた。

あ……

まさか、と思う。急に嘔吐感が襲つた。もし自分の思つてゐる通りだつたら、なんて……

彼女は、あの日、ロンドンへ行く予定だつたんだ。あつちの天文学会の開催する観測会に親と参加すると言つていた。まったく、それはしゃべり合つていつたら……

どじが楽しそうな口調の裏に隠されたものを、見逃すはずがなかつた。

今でも覚えてるよ。成田発、778便。午前10時22分4

1秒。その機影は、レーダーから消失。後に派遣された調査隊によつて太平洋に浮かぶ機体破片が見つかっている。エンジントラブルによる事故とかテロとか言われているけど、その真実はまったくわからない。彼女は家族全員で行つていたから、何も帰つてこなかつたよ。彼女のものは何も、ね。

先輩は何かを堪えるように、空を見上げた。そこには飛行機が雲の尾を引きながら飛んでいた。

キーんと甲高い音が響いている。

まるでその音を全身で感じるよう私は目を閉じた。

ああ、そうか……彼はいつもこうしていたんだ。
まるで、彼女を思い出すように、空を見上げて。
まるで、彼女を感じるよう、空を見上げて。
まるで、彼女を見るように、空を見上げて。

もう、どうしようもなかつた。

どうなつても、かまわなかつた。

深い傷。

それを塞ぎたいわけではない。それは自分には到底無理だから。
けれど……

私は彼を抱き締めた。

『かげり』（後書き）

実は少し前に書いた短編だったのですが、久々に見直してみると、粗はあるは恥ずかしいわで、まともに読めませんでした（苦笑）まあ、こんなこともたまには書くんだな、と館波をご存知の方は思つかもしれませんね（汗）…それはさておき、話は変わりますが、僕は空が好きです。他の小説でもたまに書いてますし、猫の次に好きだと思います。何故なんだろう、と見上げるのも空。誰もの上にあつて、広いもの……でもからなんですよね。なんだか不思議です。ああ、意味わかんなくなってきたしね（苦笑）まあ、こんなこと考えながら、空、書いてます。

『もの先にあるもの』（前書き）

D
· C
· P
· - f e a t
· 藤澤翠

『その先にあるもの』

世の中にはどうやつたつて自分には手にいれられないものがあるて、それが必ずしも、自分の興味のないものではないことに気がついたのは、高三の夏だった。絶望に似た喪失感と、安堵と渴望による葛藤が繰り返される日々が続いた。

幸せは自分で掴むものだとよく聞くが、自分の手の届く範囲に幸せなんてものが存在しないことを思い知ったのは、大学一年の夏だった。今までそんなことにも気付いていなかつた自分に、同情する覚えた。

四つ下の弟が自殺したのは、大学三年の夏だった。
就職して一年目の夏に、会社が倒産した。それが一昨年のこと。
去年の夏には婚約相手に逃げられていた。

だから、今更夏が来るからといって心が躍るなんてことは、ありはしなかつた。

二十六歳の夏。

青春とは程遠い、ひどくたびれたように見える、夏の空。

すべては過去のことだった。だから僕は生き続けられていたし、世の中は続いているのだと思う。

気がつくと、電車の窓の外をながられる雨にぬれた街を眺めながら、そんなことを考えていた。今年の夏は涼しい。雨の街も、じめじめとした雰囲気ではなかつた。ただ、薄靄に包まれて視界の悪い景色は、儚げで、視線を逸らしがたい存在感があつた。儚さの存在。

駅から徒歩五分。会社に着いた。小さな雑居ビルの一階。主に雑誌のデザインや編集を手がける、小さな出版社。雑誌といつてもコンビニや本屋に並べられているようなものではない。その手のジャ

ンルの専門店の片隅に置かれているよつな、発行部数が極めて少ない専門誌ばかりだ。

薄汚れたドアを開けると、エアコンのかビ臭い冷気とともに、甘い紫煙が漂ってきた。

「田島さん、また中で吸ってるんですか？」

窓際のデスクで不機嫌そうにパソコンのディスプレイを睨んでいた男は、そのままの姿勢で、

「……ん。まあ。」

とだけ答えて作業を続けていた。

「柏木さんが戻ってきたら、また怒られますよ？」

田島の正面のデスクにカバンを置き、雨で濡れたシャツをエアコンの風にあてて乾かそうという無駄な努力を試みてみる。そんな僕を、田島はわざかにパソコン画面から視線を上げ一瞥し、

「……ま、そん時やそん時。その前に換気しておいてくれや。」

と囁うと、また作業に戻ってしまった。田島の左手の人差し指と中指の間に、まだマイルドセブンが挟ままだままだ。

「はあ」

しばらく換気は出来そうにない。

換気機能付のエアコンに買い換えるべきだと思った。

数分後柏木さんが戻ってくるなり、「ちょっと取材に出てきます」と田島さんは足早に去つていった。今日は直帰かもしない。えてして、事務所には柏木さんと僕だけがのこされ、タバコ嫌いな柏木さんがそそくさと窓を開け換気を始めたため、暑さと湿気に戦いながら仕事をこなさなければならなかつた。

十分後。そろそろいいだらうと思い、エアコンのスイッチを入れ、窓を閉めようとした時、柏木さんが唐突に口を開いた。

「なあ、新井」

「あ、まだ換気しますか？」

「いや、もういいよ。暑いし。そんなことよつお前に頼みたい仕事があるんだけど」

そんなことを言いながら、全くパソコン画面から顔を上げない柏木さん。この事務所の人はみんなこんな感じだ。

とりあえず窓は閉める。

「今度出す雑誌のぞ、表紙用に空の写真撮つてきて欲しいんだけど」

「・・・空の写真で、どうのですか？」

「なんかこう・・・ファーとして、キューンって感じの」

どんなんですか。

「とりあえず、キレイなの。青空でも夕陽でもなんでもいいから。カメラマン、いつも通り伊藤さんに頼もうと思つたんだけどさ、なんか長期でスペインに行つちゃつたらしくて、連絡つかんのよ。だから、お前、よろしく」

柏木さんはすべての会話をパソコン画面から視線を外さずに済ましてしまった。

まあ仕方ない。

こんな無理やりな仕事が今までに無かつたわけではない。
好きな写真が取れるんだから、よしとしよつ。

「二・三日顔出さなくともいいから。出社にしとく~」

手をひらひらさせている柏木さん。たまに行動がおかしくなる。

「じゃあ、今日はもう帰りますね」

荷物をまとめる。埃が積もった棚から、置きっぱなしにしていた私物のカメラと三脚を取り出し、点検。

異常なし。

帰りにフィルムを買つて帰らなければ。

去り際に、柏木さんに呼び止められた。

柏木さんはやつぱりパソコン画面から顔を上げずに

「新井、がんばれよ~」

と手をひらひらさせていた。

階段を下りていく途中、小さく聞こえたドアが閉まるバタンという音が、心地よく感じた。

『その先にあるもの』（後書き）

かちゅはコメンタリーの倉田さんと舛成さんが面白いんですよ。
え？なに？・・・あどがき？オレ、時雨 恵一みたいのできないよ
？とまあ、あとがきだそうですが、完結した話をあれこれコメント
しても意味ないしね、短編だし。・・・ん？完結してねえだろ？・・・
・いやいや、完結してるんですよ、これ。うん。少なくともオレは
もう続き書く気ないね。誰も望まんだろうし。まあ、そんなこんな
で、こんな話ですから。僕自身、一切成長していないことが分かる
方もいらっしゃるかと。あ、オレのこと知らないか。えっとね、毎
年定演に来て、ステージから見て一番左の一番前にいる人だよつと
！

『空の箱』（前書き）

D · C · P · f e a t ·

W · アップラクサス

『空の箱』

夢籠暦20××年6月24日

空色のお客様現る。

“青の歌” “空の箱” をお預かり。

「良いのですか」

その意志は堅い模様。「本当に良いのですか」
未来は決まっていることを知らなによつた方ではない。

でも。

でも僕は、そんなふうに未来をひとを試そつとする輩はキライじや
ない。

だつて…

『 今晩は』

『 今日は！』

扉が開くのをわかつて いたかのよつこ、夜色と朝靄、そつとしか形容できないふたりが私を迎えた。

『 まだ引き返せますよ』

夜が言つた。

『 どうする？』

綺羅綺羅と朝がわらつた。

以前と変わらない会話。昔ここへ來たときは、この言葉たちに氣圧されて、私はこの部屋をあとにした。でも、もう、迷わない。

『 いいえ。』

笑つて言えた。

朝は私に微笑みかけ、夜は一瞬唇を噛んだ気がした。そして、言つ。

『 『 ようこそ。“夢わたりの小部屋”へ』』

夜と朝が同じ笑みを浮かべる。

『 『 あなたは大切なお客様です』』

そう。昔はこの言葉が怖かつた。でも。

『 もう引き返せませんよ』

『 御用はなあに』

夜と朝は代わる代わる言葉を紡ぐ。

『 預かつて頂きたいものがあるんです』

『 お名前をどうぞ』

『 大崎未来です』

夜の表情は全く変わらない。しかし朝は困ったような顔をした。

『 ちがうよ。』

違う…？違うとは何なのだ？。私の名前は大崎未来。でも、ここ

では違うのか。じゃあ… そつなんだ。

『サキといいます』

私の口からするりと言葉が。

夜の微笑。そうだ。わたしはサキだった。

『サキ様。何をお預かりしましょう』

わたしは何も持つてこなかつた。沈黙が落ちる。わたしは何を預けようというんだろう…。

『サキちゃん?』

朝が励ますようにわたしを見つめる。ほんやりと白いマントのような上着が目にはいる。

『どうしたの? サキちゃん。はやく、出しなよ』

白いまつしろい長いズボン。太股にかかるスカート。ぜんぶ真っ白。ぜんぶ…

わたしは箱を胸に抱いていた。そして歌う。青い青い青い…歌?

朝と色違ひの服を夜は着ている。黒黒黒。

『“青い歌”と“空の箱”ですね。確かに預かりしました』

夜は深々と背を折り、わたしを見た。しゃぼんだと同じいろの朝と同じ色の瞳。服も形も中身も対照の二人。瞳だけが同じ。

『ある人がきたら渡してほしいのです。あの日までに…』

『承知いたしました』代わる代わる一人は口を開く。

『それで、この日までに其が來たら、“青い歌”を来なかつたら“空の箱”を渡すんだね?』

まだなにも言つてないのに。

『はい』

わたしはもう頷くだけでいい。わたしのために。

『…よろしいのですか?』

夜はこころなしか悲しそう。わたしは…、…に泣かないでほしかつ

た。…？なんだっけ？

『ええ。どちらを渡しても構わないわ』

『承知いたしました』

『これで全部かな？』

気が付くとわたしのことばは文字となり、“はい”の中に吸い込まれていた。そう。ここへ初めからそうだった。見えなかつただけ。

『では。またどこかで。今日は今までで一番楽しかつた。ありがとう。』“私の話を聞いてくれて…ありがとう”

『滅相もございません。お客様のためなら、世界の果てまでも、』

『あなたのために』

夜と朝のハーモニー。それもこれで…

『さよなら』

緊張がほどけて、わたしはまたつい思い切り扉を引いた。

ギイイイイイアつ。

『…』

取れた。

『逆です。お客様』

『あははははははは…』

夜の苦笑。朝の破顔。

わたしもおかしくなつて…

「はは…はははは」

『ふふ…あはははははは』

わたしは笑つた。じうじう、部屋はとおのいといつた…

青い少女が去つていつた小部屋。

『ナイスだね！…“夜”。わざとドアを壊しておくだなんて。僕感

心しちゃつたよ』

『私は彼女の願いを叶えたかっただけだ。越権行為か？』
『やさしすぎるよ。『夜』は』

話す間に日は迫る。彼女が与えた精一杯の期限。この部屋は“普通”と時間の軸が違う。

『来ると思つ?』

『お前は…どう思つのだ?』

『僕は好きだよ。決まった未来を変えようと搔く姿は。だつて…』

『さあ“青い歌”という名のこの鍵を使つときがきたぞ』

『…ふふ。迎えに行かなくけやね、彼女』

青いペンキで塗りたくられた個室。抱き締められたスケッチブック。

『綺麗だね』

すべてのページが青いクレヨンで塗りたくられていた。むらなく、全て。

髪は長くのび、爪はここ数年切られた気配がない。絵の具がぶちまけられたベッドと床。

サキはそこに横たわっていた。涙をたくさんしたのだろう。あとがついてしまっている。病魔に耐えられなかつた体。白くやせほそつた頬。

それでも、美しい、死に顔だつた。

真っ青の部屋。カベも天井もベッドも床も。白かつただろうサキの服も斑模様。

『サキちゃん…雲みたいだよ…』

『“靄”箱をあける』

『“空の箱”だね?』

夜は頷いた。

開かれた“箱”は両手に少し余るくらいの大きさしかないのに、部屋のすべてを飲み込んだ。色を全部。哀しい青を全部。

スケッチブックも真っ白になった。

最後に“夜”はサキを抱き上げる。そして、“箱”へ。

『サキちゃん…頑張ったね』

サキはその“箱”の中、すっぽりとおさまった。

夢籠暦30××年9月7日。

サキちゃんの待ち人が来た。

僕たちはもちろん“空の箱”を渡した。真っ青の箱。

オカアサンという人間だった。

『ミライはここだと聞いたのですが…!!ミライはここですか…!!ねえ答えなさいよ…!!ねえ…!!』

『はい。お預かりしました』

『ミライ…!!ああミライ。良かった。あの子は小さい頃から外になんか出たことなくて。その…病気…で。空しか知らない子なんです。一日中空ばかり見て。』

『恥じてるの？それ』

『ええ…!!もちろんですとも…!!できそこないですわ。だから私がいないとダメなんです。わたしがいなくちゃ…!!はやくミライを出しなさい…!!出しなさい…!!』

『こちらがお預かりしました…』

『ああミライ…!!ここにいたのね…!!』

そうしてオカアサンは“空の箱”から大崎未来を取り出した。抱き

締めて、壊れものを扱うみたいに、連れて帰った。

サキちゃんはオカアサンを試した。命をかけて。歩けない足で歩いて、廃屋の小さな部屋で待つた。自分を探してくれるかどうか。そして、自分の誕生日を覚えていてくれているかどうか。死ぬまで、待つた。でも、オカアサンは来なかつた。誕生日も覚えてなかつた。ただ彼女の押し殺した願いが叶つただけ。

『自由になりたい』

『思い切り笑いたい』

透けて青くなつてこの部屋にやつてきた彼女。歩けないから空を飛んで。それも気づかずに。

サキがいつたあと、“夜”はずつと泣いていた。名もない僕らに名を与え、去つた少女。サキを想つて彼女は泣いた。ねえ。未来を変えようとするとんて無理なんだよ。でも…そんな輩を僕はキレイじゃない。だって…。

だって…

愚かしいじゃない。

なんで“夜”は泣くの？

僕には永遠にわからないよ。

わからないよ…

白いスケッチブックは風に揺れて、ページは空へ、かえりうとしていた。

“
f
i
n
”

『空の箱』（後書き）

そら【空】 1・地上に広がる空間。地上から見上げる所。虚空。2・空模様。天候。時節。3・落ち着く所のない、不安定な状況。4・心が動搖し落ち着かないこと。放心。また、一つに決めかねている心境。…ここには空がない。あるのは都會に切り取られた“そら”だけ。だから私は空を探す。歩いては目印をつけ、歩いては慟哭する。これまで私の思考にお付き合いください、ありがとうございます。では。またあの樹木の下でお会いいたしましょう。そつと誰かがこの日を吹き消した…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6107c/>

『空』

2010年10月15日22時46分発行